

## H-2 塩竈市浦戸寒風沢地区

2012年8月29日(水)

---

報告者名	酒井 朋子	被調査者生年	1940年(男)
調査者名	酒井 朋子	被調査者属性	寒風沢区長(H-1 話者)
補助調査者	なし		

---

### はじめに

本報告は、塩竈市浦戸寒風沢地区での施餓鬼行事に関するものである。報告者はこの施餓鬼行事が行われた2012年8月29日に寒風沢を訪問し、準備から行事の途中までを見学するとともに、寒風沢区長やその他準備に携わる方々に行事に話をうかがった。

### 施餓鬼の準備の様子

海難者供養の行事である施餓鬼は、寒風沢では例年、8月29日に漁港ぞいの広場で開催されていた。燈籠流しを行うため、あたりが薄暗くなる18時ごろから始められるのが常であった。しかし東日本大震災の津波により漁港が大きく損壊し、足場も悪くなった。そのため暗くなると危ないので、2012年は普段より2時間ほど早い16時ごろからの開催となった。燈籠流しも中止された。

この日の施餓鬼準備は昼頃から始められたという。塩竈市の港と浦戸諸島とをつなぐ市営汽船で報告者が寒風沢に到着した14時には、施餓鬼棚がすでに建てはじめられていた。棚には燭台などの仏具が並べられ、前後左右の四方に笹が立てられている。その笹に提灯や札などが飾り付けられていく(写真1)。果物や花を乗せた小さな木舟も置かれた。施餓鬼棚の隣にはリンの置かれた台がある。

施餓鬼棚を立てる準備の多くは男性が担っている様子である。少したつと何人かの女性が到着する。女性の1人は小さな木の舟を持参しており、それを施餓鬼棚の上に置く(写真2)。この舟は身内から海難者を出した家が施餓鬼のときに用意するものだという。女性は夫の父を20年ほど前に海で亡くしたという。孫の運動会のときにシャコエビを食べさせてやりたいと海に出て、そのまま事故に遭ってしまったそうである。慎重で海に慣れた人だったのだが、特別な機会にぜひ、という気持ちがあったのではないかとその女性は語った。女性が持参した木舟には、この亡くなった義父の舟の名が記されていた。

この年の施餓鬼では、同様の舟がもう1つ棚に備えられていた。通常はこれらの舟にも燈籠を乗せて海に流すのだという(ただしこの年は省略された)。舟は和船大工に作ってもらうのが古くからの慣例だという。

16時近くになると、念仏講をおこなう女性たちが到着した。そろいの青い着物を着た年配の女性たちが4名と、それより年少の女性たちが6、7名ほどである。女性たちは施餓鬼棚から少し離れた市営汽船の待合室のなかに入り、着物を着た女性たちが前に、その他の女性たちが後ろに座った。寒風沢区長によると、着物を着た女性たちが念仏講の主たる担い手で、後ろの女性たちは継承のためにそれを見て学んでいるのだという。

そのうち準備にも関わっていた松林寺の住職が法衣姿で到着し、16時ごろから施餓鬼が始まった。女性たちが鐘を叩きながら念仏を唱え始める。区長が挨拶をおこなった後、松林寺住職が施餓鬼棚の前で経を上げた。

### 寒風沢区長への聞き取り

震災があった2011年の施餓鬼は松林寺のお堂で行ったが、今年は海際で行うことができた。この島は3名の津波被害者を出していることもあり、今年は本来の形に近い形式で行いたいという思いはあった。

例年であれば、燈籠を寒風沢側の岸と、対岸の野々島の岸に飾りつける。色紙をつけて、赤と紫にする。昔は蜃

燭を使ったが、近年は発電機を使って豆電球をともしている。画像は2001年の燈籠流しの様子（写真3）。施餓鬼棚を飾りつける提灯も津波によって流されたが、松林寺が用意に奔走してくれ、100個をそろえることができた。

2001年の念仏講には10名ほどの女性が参加していたが、その後に5名ほどが亡くなった。継承の難しさは大きな問題となっている。



写真1 施餓鬼棚の準備



写真2 施餓鬼舟



写真3 2001年の燈籠流し